

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の総括的かつ細目に関する研究」(基盤研究(B)(1)、平成13・14年度、代表者伊藤隆、課題番号:13490012)

1. 高橋 久志氏

たかはし・ひさし 上智大学外国語学部教授

日時 : 2001年3月12日

出席者 : 伊藤隆 季武嘉也 伊藤光一 小池聖一 中見立夫 戸高一成 西川誠
土田宏成 千葉功 黒澤良 矢野信幸 小宮一夫 大久保文彦 東中野多聞
武田知己 西藤要子 高橋初恵

高橋 上智大学の高橋でございます。何人かの方はすでに長い間お付き合いさせていただいているわけですが、大半の方が初めてでございます。今回、近代日本史料研究会でお話をせよという伊藤先生のご指示がありまして、私のようなものでも果たして役に立つかどうか、何ともわかりませんが、一応用意してきたお話をさせていただきます、もしご質問がありましたら、私の知っている限りお答えしたいと思います。

まず、お手元の簡単なメモ程度のものでありますけれども、大きく分けて3つの主題に基づいて史料関係のものを列記してあります。1番目は「日本占領下の日比関係」。2番目は「汪兆銘和平工作と南京政権関係」、3番目は「その他」ということになっております。これらはいずれも、私が直接関係しているリサーチあるいは研究の一端でありまして、まず1番目の「日本占領下の日比関係」という順序で話していきたいと思っています。

日本占領下の日比関係というのは、科研費の研究プロジェクトがありまして、日本のフィリピン関係の研究者とフィリピンにおけるフィリピン人の研究者との合同研究であります。3年間に渡って、日本と、インドネシアの専門家もいるんですけども、フィリピンとインドネシアの日本占領期における軍政といたたらいいでしょうか、統治も含めまして、比較研究ということをやっております、今年が最終年度であります。私は、政治指導者の対日協力者——コラボレーターというテーマでずっと関心を持っておりますものですから、そのテーマを追っております、これまでに日本はもちろんですけども、フィリピン、それからアメリカにおける史料の調査、収集を行っております。

去年の夏休みにはフィリピンに行きまして、特にアテネオ大学の Rizal Library というのがありますが、そこに American Historical Collection というのがありまして、そこを中心に史料を収集してまいりました。また、一昨年夏休みにはアメリカに行きまして、アメリカの National Archives における、特に O.S.S.—CIAの前身の史料が何年か前に機密解除になりまして、自由に利用できるということで、それを見てまいりました。

まず、最近行ったところのアテネオ大学の American Historical Collection でありますけれども、これは非常にユニークなコレクションでして、日本ではどれぐらい知られているか。フィリピンの研究者にはよく知られておるんですけども、日本史など、あるいは外交史の研究者にはあまり知られていないのではないかと思います。あそこの図書室の入口には名簿論などがありまして、何年間かの、そこに訪れた人の名前を見るチャンスがありまし

たけれども、あまり日本人は使っていないようであります。ここは、特に戦時中の日比関係を研究する上でも非常に重要な史料庫ではないかと考えています。

私の専門は、日本史というよりはどちらかというと国際関係史でありますから、日本史の史料の読み方などは正式な訓練は受けておらなくて、オンザジョブトレーニングでやってきたものですから、史料についてはあまり皆さんのように知識はないんですけれども、ここを訪れた時には非常にびっくりいたしました。ここに書いてありますけれども、もともとはアメリカ政府の善意によって収集、寄附された書籍とか、あるいは雑誌とかパンフレット、あるいは写真類に至るまで。これはずっとアメリカの大使館にあったんですね。これを95年にアテネオ大学に管理を委譲するという形で、寄贈されたわけであります。そのなかには、個人のコレクション、あるいはフィリピンにおいてかなり高い地位を占めた人々が、プライベートライブラリーとして持っていた本なども寄贈されておりますし、非常に面白いコレクションだというのがわかりました。

そして、ここでは目録というものはないんですけれども、そこへ行っているいろいろ調べてみなければいけないんですけれども、ざっと蔵書を見ただけでも、特に日本の軍政関係のものがずいぶんまとまってあるなと思いました。ここに書いてありますけれども、蔵図書は12,000冊であります。それから更に、フィリピンはアメリカの植民地でありましたものですから、それに関係する **Official Gazette** とか、あるいは日本関係では **Philippine Executive Commission** というのがあるんですが、これは **Vargas** がチェアマンだったんですが、その **Official Gazette** がありますし。これは聞くところによりますと、**Official Gazette** 全巻、国会図書館にマイクロフィルムで納まっているということでありました。

それからさらに、**Official Journal of the Japanese Military Administration**、これは日本語と英文の両方がありますが、13巻ほどありました。これは防衛研究所図書館には揃っております。その他に報告書とか新聞など、特に日本の占領期においては **Tribune** とか、あるいは **Philippine Free Press** などは充実して揃っております。また、雑誌類とか写真、絵画に至るまで、ありとあらゆるものがありまして、とても1週間や2週間、1月いても、ちょっと利用して収集するには、まだ時間が足りないという印象を持ちました。

また、アメリカの統治時代の報告書類——**Governor General** と言っておりますけれども、そういうものの書類とか報告書、あるいはコミッショナーのものというのかなりあります。また、特にこの目玉としては、サントトマス大学というのがあるんですが、そのサントトマス大学では、日本がフィリピンを占領した時にアメリカ人などをそこに一時収容したんです。その記録が全部揃っております。これは、特に収容所関係のものに関心のある方、また日比関係の大きな問題がここに出てくるわけでありましてけれども、これを研究する上では、この史料は非常に重要だというふうに言われております。

それから、この **American Historical Collection** では、1年に4回出すクォーターリージャーナルとしまして、**Bulletin of the American History Collection** というものを出しております。それからこの **Bulletin** には、25年間にあたる **Cumulative Index** のボリュームが、98年に出版されております。ですから1973年～98年までですか。そのなかにもいくつか、日本の軍政期に関係するような史料なり解説なり、あるいは論文なりが見受けられました。

それからアテネオ大学というのは、日本でいえば慶応大学に相当する私立の大学でして。

フィリピンで日本の早慶に相当する大学としましては、早稲田のほうはラサール大学、そして慶応のほうはアテネオ大学というんですが、フィリピン大学は非常に有名なんですけれども、両者ともに私立の大学として、特にロースクールなどもありまして、有名な人がそこから出ているわけです。アテネオ大学の場合には確か、コラソン・アキノのブレーンなんかもこのアテネオ大学の、アテネオマフィアと言われているようなグループで、彼女をサポートしたというふうに言われております。

それから、ここには **Filipiniana Collection** というのがありまして、フィリピンの図書館というのはお金がないものですから、史料の整備、それからこうした図書館の整備というのが非常に遅れております。見失っているものもずいぶんあるんですけども、雑誌などは非常に重要なものでして、ここのアテネオの **Filipiniana Collection** でも、**Asian Studies** とか、あるいは **The Journal of History** とか、**Historical Bulletin** とか、あるいは **Philippine Historical Review**、あるいは **Philippine Studies**。この **Philippine Studies** というのはアテネオ大学で出している雑誌であります。戦前から出ておまして、重要な雑誌というふうに、フィリピンでは高く評価されております。その他、**Philippine Sociological Review** とか、あるいはフィリピンの各大学が出している、たとえば **Far Eastern University Journal** とか、あるいは **UNITAS** とか。雑誌では、これは学術雑誌ではありませんけれども、月刊誌で **Solidarity** という雑誌が、最近はまだ停刊したと聞いておりますけれども、一時反マルコスの中心的な論陣を張った非常に著名な月刊誌でありました。こういうものがここには納められております。

また **American Historical Collection** にも重複して、一部こうした雑誌が入っております。いちばんいいのは、こういう目録が揃っていればいいんですけども、残念ながらお金がない、マンパワーがないというないないづくしで、フィリピンの場合には一つ一つ当たって、どういう論文が入っているかとか、いちいち時間をかけて当たって調べることしかできないのが現実です。

それから3番目には、**Gorge B.Vargas** といいます有名な方ですが、これは **Philippine Executive Commission** の日本軍の軍政期にあたって、フィリピン側のコラボレーターの著名な人です。この **Gorge B.Vargas** が個人で収集した蔵書——特にフィリピン関係の蔵書、あるいは個人の文書類とか。彼は非常に絵画が好きでして、フィリピン人の描く絵をずいぶん積極的に集めまして、フィリピンにおける美術の発展、振興にずいぶん力を致したというふうに評価されております。あるいは彼は切手を集めるのが趣味でして、8万枚とかという膨大な数の切手とか、あるいはスペイン時代のコインとか、あまりこの研究会には関係ありませんけれども、そういうものを全部寄贈しまして、これを常設展示しております。

そして、われわれにとって関心のあるのは、おそらく彼が残していったスクラップブックとか、あるいは文書類だと思います。残念ながら、まったくこれらは目録がありません。私が見たのは、「これがスクラップブックだよ」というので部屋に入れてもらいまして、ダーッと並んでいるんですね。それを一つ一つ見ていく時間もなかったものですから、いくつか見て、「ああ、こんなものか」と。これは、日本の占領期の研究には非常に重要な史料ではないかなというぐらいの確認ができたぐらいで、ずいぶん前にNHKで、伊藤先生ご存じの片島さんがあそこへ行って、**Vargas** について番組を作ったというんですけども、

いままではほとんど誰も見せなかったと。私が今回行った時には見せてくれまして、日本人に見せたのはそれが初めてだったと思いますけれども、私は何とかコネを使って入り込んだんですけれども。

「どうするんだ」と言いますから、「いや、一応事前調査で来たんだから、これをいま利用するなんて時間的な余裕もないしお金もない」と言ったら、「利用するのはけっこうだ。ただし、利用する際には、スキャナーとかコピーの機械を持ってきてやらなきゃだめだよ。そういうものを使ったら、必ず一部余計に作って、カタログも作ったらそれを置いてくるように。ついでに機械も全部置いてくれたら理想的だ」と（笑）。「そういうことをやってくれるんだっいたらいくらでも協力しますよ」という、ちょっといま名前を失念しましたけれども、何とか女史が非常に積極的に言いまして、だいぶ気に入られたと思いまして、お昼まで御馳走になりましてですね。「また来いよ」なんて言ってましたけれども、どなたか日本側でそういう方がいらっしゃって、機械から何から全部持っていけば、ずいぶん史料を使わせていただけるのではないかなと思います。またこれに関しては、東京外国語大学のフィリピンの専門家の池端先生が、まだ Vargas が生きていた頃、彼の住まいにこれらを見せてもらいに行ったということを知っています。

それから、私の所属している上智大学の図書館では、Garcia Collection という、書誌学者でまた歴史にも非常に造詣の深い Mauro Garcia という人が一生に渡って収集した、フィリピン関係の書籍とか雑誌類、それから日本占領期の一次資料を、彼が亡くなった後、オークションに出たのを上智大学が買いまして、全部で五千数百タイトル、六千数百点からなるものであります。日本占領期の文書も少し入っております。目録が出ておりますので、もし上智大学にコンタクトをなさる場合には、わけていただけるんじゃないかなと思います。

それから5番目は、1年半になりますか、夏休みに National archives に行ってみてきたわけでありましてけれども、また去年の2月にも、短い期間ですけれども補足の作業として1週間ばかり見てきましたけれども、O.S.S.Documents というのがございます。これは Office of Strategic Service といつて、CIAの前身の情報機関でありまして、これがいろんな国に入って様々な情報を集めているんですね。そうした情報が機密解除になりまして利用できるんですが、これがなかなか曲者でして、フィリピンだけでも大変な量があります。いちばん最初に、1999年の夏に行つて私がやったことは、1週間それに時間を費やしまして、こういうボックスがあるんです。カードが全部入つてます。そのカードは、同じものがたくさん入つていたり、いい加減な、何の並び方もありません。ただポンと入つてます。

さあ、どうしようというので、これを全部クリアするしかないなというので、カタログもないものから1枚ずつ括つていって、それをコンピュータに打ち込みまして、1週間かかりまして重要と思われるものを一応カバーしまして、それからあそこで書類を実際に手に取るわけでありまして。O.S.S.の資料というのは、フィリピンはフィリピンというふうにまとまっているんじゃないでして、全世界のありとあらゆる史料が箱のなかに一緒になってるんですね。ですから、何番の何と言っても、いろんなものがそのなかに入つてます。そうするとそれを時々見ながら、「こんなものがあるよ」「あんなものがあるよ」と言いながら、自分のフィリピン関係のものじゃなくていろいろ楽しむことができたんですけれども、

肝心の史料がない場合があります。どこかに行っちゃってるんですね。あるいはマイクロフィルムの方に行っちゃっていて、現物が抜かれちゃってる場合があるんですね。そこをまたトレースするというようなことで。実際に見つからない場合もあります。非常に難儀をしまして、でも一応全部カードを見まして、一緒に協力してやる人もいたものですから、重要なものは何とかカバーしてきました。

去年の3月は、それに加えて中国関係のものを見はじめました。これもだいぶあるようでして、最近の情報によりますと、特に1945年、46年、47年あたりの、日本軍が中国で武装解除されるわけですけれども、そしてそれから内乱になるわけですね。そのあたりの史料が解除されたということで、いまちょっと情報を待っております、その史料担当者を通じた情報をEメールで待っているところであります。これがもし見れるのであれば、もうひとつ私の関心のある汪兆銘政権関係のO.S.S.史料もあるはずだということで、これも10日後にアメリカにまいりまして見てくる予定であります。

また、O.S.S.の史料の他に国務省の史料もありまして、これもなかなか探すのが大変なんですけれども。ひとつの可能性としては、重要な戦中期の日本のフィリピンにおける行動を知る上で、重要なものではないかなと思います。それから、いろんなフィリピン人あるいは対米協力者というんですかね。もちろんゲリラも含めますけど、そういう人からの情報がたくさんあるんです。そして、びっくりするんですけれども、部隊の小隊、中隊、大隊という軍隊の、小隊長の名前まで明確に調べてある。時々フィリピンのところを見てみましたら、興味がありますから括ってみると、そんな史料を発見することができまして、かなりこのO.S.S.というのは、日本軍の行動について詳細に渡って把握しておったんだなという印象を持っております。ただ、それが史料の総数にしてもどのぐらいの規模なのかまったくわかりませんで、これから時間をかけて調べなければ、どうしようもできないものだと思います。それは後で述べる情報関係の史料もそうなんです。

それから6番目、ついでにフィリピン関係ですから挙げたんですけれども、National Archives というのがあります。これは、かなり前にフィリピンの大学で、国際交流基金の関係で教えるチャンスがありまして、その時にいろいろ史料を見たんですけれども、そこで見たのは、日本の戦犯の史料が本当にもう実に見るも哀れな状態で、ビニールの紐で縛ってあって埃だらけで積んであるんです。それを、ほんの一部ですけれども見ましたけれども、いかにいい加減なカンガルーコートでやられたんだというのはわかるようなものがたくさんありまして、これは何とかならないのかなと。誰かやる人はいないのかなと。そういう強い印象をもったものですから、ここに挙げておきました。National Archives で史料を使って研究する……フィリピン政治とかそういう関係者はいるでしょうけれども、日本から特に占領期について、これからいろいろ史料を探したりするひとつの穴場かなというふうに思いました。

2番目は、汪兆銘和平工作と南京政権関係でありまして、最近、汪兆銘関係の研究が非常に進んできてまして、中国はもちろんのこと、台湾、あとアメリカが先鞭をつけたんですけれども、ここ日本でも注目されるものとなってきてまして、資料集などいろんな形で関係の研究も出てきております。外務省外交史料館では、支那事変関係——これはもう皆さんご存じと思うんですけれども、支那新中欧政府樹立関係とか、あるいは矢野記録という、汪兆銘工作のつとめから関わった矢野征記という事務官でありますけれども、汪兆銘と

ハノイで実際にコンタクトをするに至って、それから上海に汪兆銘一派を連れて来るに至るまで、詳細な記録が残っております。

それから、防衛庁防衛研究所図書館にも、少しでありますけれどもこれに関係したような史料が残っております。また、京都の陽明文庫では、近衛文麿関係史料で、南京政権関係、汪兆銘工作関係の史料が残っております。それから、何といたってもすごい史料の山は東京大学の社会科学研究所にある島田史料でありまして、これはもう皆さんご存じなので、改めてここで指摘するまでもないと思います。それから東洋文庫では、まだ私は調査しておりませんが、南京政権の官報が残っていると言われております。

それから6番、7番、8番と、これはアメリカであります、まず Hoover 研究所。ここでは汪兆銘の著作集が、全部揃っているわけではありませんけれどもあります。また、雑誌類とか新聞類などもここで調査ができるのではないかと思います。また、ハーバード大学の Harvard-Yenching Library にも、汪兆銘関係の著作が何点か残っております。ずいぶん前でありましたけれども、フーバーとハーバード、それからバークレーまで行って調べたことがありまして、日本では汪兆銘の書いたものは和平建国全集……全集と言ったらいいか、そういう宣伝広告も含めていろんな形で出ているんですけども、彼の若い時からのものも含めまして、そういうものがちゃんと揃っていないものですから、外国にあるんだというようなことで、ここに列記いたしました。

それから National Archives。これは今回、ぜひここで汪兆銘関係のものを調べてこようというふうに思っております。O.S.S.から何か出てくるんじゃないかなというふうに考えておるわけです。それから国務省のファイルがあるんですけども、これはすでにマイクロ化されたもので、Internal Affairs of China というのがあります。これは中国の辛亥革命からの中国関係の内政、戦間期、戦中期も含めまして、それがシリーズもので出ております。これはマイクロで入手可能なんです、あまりにも値段がはるものですから、上智大学ではまだ買っておりません。慶応に確かあるというふうに聞いておりますけれども、まだ史料を見るまでには至っておりません。それから、アメリカ政府の在外公館関係の史料というものも Archives で調べれば、南京政権に関して、あるいは重慶政権あたりのものもいろいろ出てくるのではないかなというふうに思っております。

それから9番目は、イギリスの Public Record Office ですが、これはまだ私はまったく調査していないところでして、私、ヨーロッパはこんな歳で一度も行っておりません、アメリカはよく行くんですけども、まだイギリスまで足が及んでなくて、いつか近いうちに調べてやろうかなと思っております。

それから10番目が南京の第二档案館でして、ここはずいぶん前になりますけれども、慶応大学の池井先生、防大の戸部先生、あるいは読売新聞の松崎さんと4人で行った時に、南京の第二档案館を見せてもらいました。特に汪兆銘関係のものをを見せてもらいまして、「どうぞ、いくらでも見てください」というんですね。「見てください」といっても、まったく目録がないものですから。最近、何とか指南という、第二档案館の指南書が出まして、あれは目録じゃないですから本当に役に立つかどうかはわからないと思うんですけどね。ともかく、たくさんあるのはわかったんですけども、しばらく前でしてそれ以後、行っておりませんので、どの程度オープンになっているのか、このあたりはぜひとも中見さんにお聞きしたいことなんです。

当時は、もう全く入れなかった。そこで見せてもらったんですけども、袋に全部詰まっているんですね。「どれでもいいですから」と言うんですけども、開けてみたんですけどつまらないものばかりあったなという意識がありまして、「いつ整理できるんですか」といっても、「わからない」と言うんですね。いまだにまだ整理ができてないんじゃないかなと。いまハーバード大学で、入江先生のお弟子さんですけども、中国人の方で第二档案館に勤めていた方が汪兆銘政権の研究をするんだというので、いま博士課程に所属しておりますけれども、この間慶応で研究会があった時に、大きな国際シンポジウムですか、山田先生なんかが主催したのに来てた方ですけども、彼は「いや、自由に見られるんだよ」と言うんですけども、私はそうではないんじゃないかなと。よほどの強いコネでもなければ、あそこで自由に史料を見てコピーをさせてくれるなんていう特権は、なかなか得られないんじゃないかなというふうに思います。

また、中国の上海とか枢要な都市の档案館なども、こうした南京政権関係の史料は何か残っているんじゃないかなと思いますし、またここでは台湾を挙げておりませんが、台湾では国民党の党史会というのがあるんですね。あそこにはかなりのものがあるというのを、実際に台湾に行って話を聞いたんですけども、見せてもらえるというのはよほどのコネがなければだめだと。いまだにその状況は変わらないんじゃないかなと思いますけれども、皆さんのなかでこのあたりに詳しい方がいらしたら、ぜひ教えていただきたいと思っております。

それから、少し駆け足気味でございますけれども、その他に移らせていただきたいと思っております。私、外交史料館である研究会がありまして、ここにいらっしゃる小池さんなんかはご存じだと思うんですけども、皆さんのお手元に配ったなかで、「米国等における昭和戦前期日本関係史料について」と。「米国等」というのは、オランダも入っていますから。別に私はオランダに行ったわけではなくて、オランダに詳しい大学院生がいたものですから、その人に情報を提供してもらってまとめたものでありまして、日本関係の史料として、後でお読みいただければと。

特に私が注目しておりますのは、国立公文書館にある情報関係の史料であります。暗号解読関係ですね。これはもう莫大な量がありまして、どうやって攻めて行っていいかわからない、一人ではとてもできない、かなり大がかりなプロジェクトなどを組んで取り組まない限りは、とても手に余るという代物であります。これをお読みいただければと思います。

それから、アメリカの議会図書館に長年眠っておった、米軍が占領して接收していった旧陸海軍の史料——図書が多いんですけども、なかには一次史料も入っております。これは、防大の田中宏巳先生が何回も議会図書館に行って見て来まして、これを目録として出しております。私自身、まだ田中先生が作業している頃に訪ねまして、当時私は防衛研究所の戦史部に所属しておりまして、「接收された陸海軍の文書で戻ってきていないものがある。それはいったいどこにあるんだ。おまえ、調べてこい」と言われまして、たまたまアメリカの学会に行くチャンスがあったものですから、それにのっかっていろいろ人に会ったりして調べておりました。それが、もうすでに田中さんはそれをやっております、何年か前に立派な総目録ができております。

それから、皆さんもご存じと思うんですけども、議会図書館には満鉄関係の史料がず

いぶんあります。これは、国会図書館ですべてマイクロフィルムに撮ったと聞いております。また、議会図書館との関係では、レジュメのⅢの4番の、Yoshiko Yoshimura さんという方がお辞めになる前に、日本軍の文書も含めまして、特に日本を占領した進駐軍が接収していった、それから検閲のために持っていった図書、文書類のチェックリストというのがありまして、これはご存じだと思いますけれども、簡単に手に入るものだと思います。92年に出ております。

田中さんの本をみても、それから Yoshimura さんのこうしたチェックリストを見てもわかると思うんですけども、昭和30何年かに外務省を通じて防衛庁は、陸海軍の文書を返してくれと言ったんですけども、結局もう返ってこなかった。あるいは書籍類を請求しなかったものですから、生の一次史料だけ請求したものですから書籍類がそのまま残っちゃって、いまでも惨めな状況にあるということでありました。この点、田中先生はずいぶん、アメリカだけでなく今度はオーストラリアも入って、オーストラリア国立戦争記念館（オーストラリア・ウォー・メモリアル）にある史料をまとめてくださいました。私はまだこれを手にしておりませんので、私が実際に行って見たもの、特にアッティスの関係の充実した史料にはびっくりしたんですが、その他に田中先生が見つけたものを見ていけませんので、これ以上は詳しくしゃべれません。

それから5番目に出したのは、95年6月9日ですから、いまから5年ちょっと前に国連大学で、「インターナショナルリゼーション・オブ・ジャパン・アンド・オープン・ガバメント」という情報公開法についてのシンポジウムがありました。これは御厨先生なども出席なさったと思いますけれども、外国からは何人かの方がいらっしゃいまして、入江先生なんかも来ていたのを記憶しておりますけれども。このシンポジウムで、National Security Archive の関係者が来まして、いかに National Security Archive が機能しているかと。できたのは確か……そんなに歴史は古くはないんですけども、年間予算100万ドルで、その100万ドルのうちの2割は、マイクロフィルムとかそういう国家機密解除したものの文書を売ることによって得ていると。あとは善意の人の寄付によって賄われて、その National Security Archive に所属している大学の研究者などいろんな人から、あるいは政府も含めまして、あるいは団体も含めまして、ある文書について解除せよ、解除してほしいというリクエストがありますと、アメリカではそれに対応できるシステムがもうすでに整っていると。これはもう皆さんご存じと思うんですけども、参考のためにここに挙げておきました。

以上、非常に大雑把な話でありまして、何か質問があればもう少し具体的に、答えられる限りお答えしたいと思います。

伊藤 ありがとうございます。ずいぶん駆け足のお話でありましたので、皆さんいろいろご質問があるのではないかと思います。私は、フィリピンの関係というのはいままであまり思ったこともなかったものですから、非常に面白くうかがわせていただきました。フィリピンのいろいろな関係の史料のなかには、日本語で書かれたものもずいぶんあるわけですか。

高橋 日本語で書かれたものは非常に少ないですね。ほとんど英語です。軍政機関が出版したもの——パンフレット類とか、そういうのはちらほらですね。

伊藤 軍政には、英語を使ってるわけですか。

高橋 英語を使っています。日本語の教育もフィリピンで始めましたけれども、やっぱりアメリカの影響というのは大きいですね。

伊藤 Vargas なんかとのやり取りも、みんな英語になってるわけですね。

高橋 英語ですね。ただ、メモ類などが残っておりまして、Vargas と親しかった外務官僚ですね。いまちょっと名前を失念しましたが、その人が常に。そのやり取りなどを見ても、Vargas のオフィスにおったんでしょうね。もし本当にそうした方面の研究をやるんでしたら、これなども一つ一つ調べていかないと。

伊藤 フィリピンの占領についての研究というのは、どんなふうになりました？

高橋 最近、盛んになりまして、共同研究でありますけれども、これまでにいくつか本が出ております。

伊藤 日本でですか。

高橋 はい。一部、英文のものも。アテネオマリナ大学だったかな。

中見 うちの研究所に池端雪浦というのがおりまして、岩波から日本語版がでていいます。それから、防衛庁にあるフィリピン関係の目録がアジア・アフリカ言語文化研究所から出てますよね。

高橋 川島みどりさんですね。

小池 それから、一橋の中野さん。

高橋 中野さんも仲間ですね。

小池 それからもう一人、立教大学の永井という先生。

中見 共同研究は、フィリピンだけじゃないはずですよ。フィリピングループとインドネシアグループと、ビルマはあるのかな。ここ10年ぐらい、ものすごく熱心に活動されています。

高橋 豊田財団からかなりお金をとって進めておりますね。

伊藤 日本占領下のフィリピンについての、いちばん基礎的なデータになるのは何なんですかね。

高橋 ここに書いてある、The Official Journal Of the Japanese Military Administration ですね。これは日本語と英語、半々とは言いませんけれども、これは防研にいらっしゃれば見ることができますけれども。

伊藤 広報的なものですか。

高橋 軍政広報ですね。あとはやはり聴き取り調査とか、そういう地道なやり方で史料を集められていますね。フィリピンというところは、確か開戦の時にはコレヒドール占領までに、日本軍の死者はわずか9000人ですか。ところがレイテのあれで50万人死んでますから、最も太平洋戦争で激しい戦いが行われたところですから、そうした文書類とか何とかというのもいちばん最初に焼かれたりしたでしょうね。気候風土もありますし、あそこは本当に文書は、長期保存のためにはよほどのことをしない限りは、すぐだめになっちゃいますからね。

伊藤 われわれのこのグループで考えていることも、やはり在外の日本関係史料というものも、きちんと日本の責任で集めないといけないんじゃないかと。そういう仕掛けを国家的な仕事としてつくる必要があるということなんですけどね。

高橋 あるいは戦時中に、いわゆる捕獲文書と言ったんですかね。兵隊の手帳から何かから、

ああいうものをずいぶん米軍は利用して、作戦の計画を立てる上で情報収集を積極的にやりましたよね。あれなども、NHKでずいぶん前ですけれども、ガダルカナルとか硫黄島で見つかったものが国立公文書館で公開になってるということもありまして、私も見に行ったことがありますけれども。あれはほんの一部でして、ほとんどはもうみんな焼いちゃったらしいですね。そういう兵隊の手帳とか日記などを読んだ人というのは、ドナルド・キーンさんとか、戦後日本研究の第一人者になっている方が多いわけですがけれども、そういう人達の記憶によりますと、どんどん焼いたということを聞いております。そういうのが残ってるのはほんの一部でありますけれども、時々防衛研究所の戦史部のほうにもアメリカ人から、「こういう手帳があるけれども、返したい」というのがあります。私も直接、うかがったことが何べんかございますけれども、実際にその所持者の……所持者はもう亡くなっておりますけれども、親類あるいは兄弟に戻ったこともありますし。

伊藤 それは防研に入ったんじゃないくて、遺族に。

高橋 遺族のほうにですね。

伊藤 Vargas の個人文書というのは、ご覧になったことはあるんですか。

高橋 ええ、スクラップブックだけだったですけどね。非常に丁寧に、秘書を使って、こんな厚いスクラップブックですけども。紙が非常に傷んでおりますから、ちょっと崩れちゃうというような状況でしてね。それで、彼らも何とかしたいと思っているんですけども、何とか女史っていまちょっと名前を失念しましたけれども、彼女の言うのには、それを全部管理してると。生前から Vargas と関係のある方で、「お金がない、人がいない。何とかしてくれないか」なんて言ってましてね。これなども、対日協力者の史料ですから、日本で何かできるんじゃないかなと思うんですけどね。そして、誰も使えないんですね。Vargas が収集した本などは、フィリピンの文学とかを研究しているフィリピン大学の先生などが来て、使わせてもらってるというのは聞いておりますけれども、この史料はあまりありません。いま、リカルド・ホセという、フィリピン大学の歴史学科で教えている人が、私の友人でもあるんですけども、やろうかなんて言ってましてね。とりあえず、Vargas のコレクションの一部使った修士論文があるんです。そこに引用したものからとつ始めに、何年かかるのかわからないけれども、史料の整理をやろうかなんていうことを言っておるんですけどね。

伊藤 そういう保存状態だと、危ないですね。

高橋 危ないですね。いまはスキャナーがありますから……

伊藤 でも、スキャナーで撮ったら危なくないんですか。

高橋 あるいはコピーですか。

伊藤 そのものを傷めないで撮ろうと思えば、やっぱりマイクロにする以外ないんじゃないですかね。

高橋 そういった意味で、たとえば上智が手に入れた Garcia Collection なんかはいいですね。あと、たとえば有名な歴史家で、セオドア・アゴン史料というんですけども、彼なんかはフィリピンの歴史家のなかで最も有名なうちの一人に入るんですけども、ずいぶんいろんな史料を残してるんですね。彼も、占領期のフィリピンについても大きな著作がありますけれども、彼自身が集めた史料というのはまだ奥さんが持っておりますね。あれも、どうなっちゃうんでしょうかね。いまフィリピンは経済的にめちゃくちゃな状況

ですから、そういったものも日本で何かできるんじゃないかなと思うんですけどね。その他、著名な歴史家などが亡くなったりすると、そういう史料は簡単に散失してしまっ

伊藤 Vargas なんていう人は、お金持ちだったわけでしょう。

高橋 ものすごいお金持ちですね。大変な財閥でして。1階には、彼が国賓扱いでいろいろな政府の高官、あるいは政治家からもらったものなどが展示してありまして、ひとつは東条さんからもらった花瓶がありました。ところがちゃんと展示してないものですから、色が褪せちゃって、何が何だかわからないまま、骨董屋の花瓶みたいで。値打ちがあるんじゃないかなと思うんですけどね。フィリピンの場合は、やっぱりメンテナンスが難しいですね。お金がない。フィリピン大学もそうですよね。フィリピン大学の図書館も、冷房がないですからね。ですから、いくらでも本は傷んで。国際交流基金なんかも、ずいぶんお金を出して本を寄贈しているんですけども、国立大学はひどいですね。私立大学はわりとそういうところをちゃんと、管理ということで、本を大切にできるような状況というのは整っておりますけれども。

伊藤 O.S.S.のドキュメントはずいぶん昔から一部ずつ公開になっていたと思いますが、僕もずいぶん昔に行った時に、来年から1年分ずつ公開になるという話をしていましたが、もうだいぶ進んだのかなと思って。

高橋 まだ進んでるということですね。公開の作業をまだやってるということですね。全部公開したわけではないようですね。

伊藤 やっぱりそうですか、スクリーニングして。

高橋 ええ。ですから先ほど言いましたように、1945年、46年、あるいは47年あたりの中国の情勢について、日本軍の復員も含めまして、そのあたりの史料がいま公開されたところですね。

伊藤 そうですか。僕はその時に、いま公開になった分というので、確かベトナムか何かのものをを見せてもらったような気がしますけれども。やっぱり1944年、45年だったと思いますけれども。やっぱりスクリーニングしてたんですね。いま公開が、CIAまで入ってきてるんでしょ。

高橋 そうですね。

伊藤 O.S.S.の場合は、公開になったというだけで、カタログがあるわけではないんですね。

高橋 もう本当に困りまして。あそこにはジョン・テラーという、お会いになったことがあると思いますけれども、日本の特に軍関係のことを研究するんだったらジョン・テラーさんだっというので、アメリカはご承知のように定年制というのがございませんから、彼は80近いんじゃないですか。毎日、出てきまして、お世話をしてるんですけども。彼に頼ってずいぶんお世話になった日本人がたくさんいると思うんですけども、ちょうど防研の小山さんていましたね、あんな感じですね。誰もフォローする人がいないんですね。若い人に言ったら、「あんなのに言っただめだよ。俺が知ってるんだから。こっちに来い」といって、教えてくれるわけですね。コンピュータなんか操作するわけじゃなくて、机の中に何かあるんですね。非常にしょうがない(笑)、お年寄りに付き合うのは慣れておりますから、教えていただいたりしてるんですけども。

伊藤 じゃあ、継承されないじゃないですか。

高橋 継承されませんね。ですから、向こうで軍関係の研究をやってるエドワード・トレイというのがいるんですけども、彼なんかに言わせると、「ジョン・テラーが亡くなったらどうなるかわからない。困ったもんだ」なんて言ってましてね。いつ亡くなってもいい、もうかなりの高齢の方ですけども。

伊藤 そうすると O.S.S.の場合は、何か塊があるわけですか。

高橋 そうですね。一部コンピュータのなかに入ったというのを、私の仲間の寺田先生といるのがいるんですけども、寺田さんが聞きつけてきましてね。今回、それを確かめてこようかなと思っているんですけども、その全体像がわかりませんからね。

伊藤 しかし、アメリカのそういうところは目録を仮に作っても、ああいうボックスにいるんなものがドンと入って、それでポッと出てくるでしょ。で、人が見て順番が狂おうが何しようが、あまり気にしない。

高橋 いやいや、うるさいです。もう、見て歩きますから。あそこは、書類を挟むファイルがありますよね。そういうファイルは一度に1つしか出しちゃいけないと。いくつも取ろうとすると、「なんだ、そこでやってるのは」なんて言われましてね。もう、大変厳しいですね。

伊藤 それはどこですか。

高橋 国立公文書館です。日本人の方で、怒られてずいぶん赤っ恥をかいてる人がいますよ（笑）。いい大学の先生が若いのに、こうやられてですね。

伊藤 公文書館にかつて行った時は、押し車に山のように史料を積んできて、「どうぞ自由にご覧ください」という。

高橋 いまは、史料を出す時間もちゃんと決まってまして、何時、何時と。その時に出してもすぐ来るわけじゃなくて、3時間ぐらい待たされる場合もありますし。向こうはのんびりしてますけれども。それで部屋のなかには、皆さんいまコンピュータを持って入りますから、紙は持ってっちゃいけないんですね。中の指定の紙を使うことと。鉛筆も中のものを使えとか、うるさいんです。全部、身体検査をされますしね。コンピュータも開けられましてね。何か文書を盗んでるんじゃないかとかですね。そういったセキュリティの面では非常に厳しいですね。コピーするのもいちいち許可を持って、これを解除したというラベルをコピー機のところへ入れて、そしてコピーが終わるとちゃんとホチキスで留めて、出口があるんですけども、ちゃんとそれが写ってるかどうかとか、そこで全部見られます。非常に厳しくなっております。ずいぶん前に行った頃と比べると、いまはいろんな点で厳しくなってますね。

伊藤 いやあ、僕はああいう扱いだから、なくなったり入れ違ったりすることがしょっちゅう起こるだろうなと思ってたんですけど。

高橋 コピーも、たくさんの方がコピーしておりますから、3分間コピーとかね。時間を計ってるんですね。並んで、「だめだよ、そこに行っちゃ」なんてね。「ここは3分間だよ」なんていって、「はい、終わり」なんてやられるわけですよ。

戸高 ワシントンのあそこから新館に移る時に、どうもインデックスが少し混乱したなという気はしますけどね。昔あったはずのが、いくら探しても出て来ないというのが若干ありますんでね。

高橋 ありますね。結局、ああいうところでは、どこかに入っちゃったらもうわかりませ

んからね。

伊藤 Garcia Collection のなかの日本占領期の一次史料というのは、具体的にはどういうものなんですか。

高橋 大したあれはないと思うんですけどね。持ってくればよかったですね、目録がありますもんですから。

伊藤 これは、手に入れることできるんですね。

高橋 できます。これは、ぜひ図書館のほうに要請してください。むしろ、書籍類がすごいものがありましてね。古い、なかなか手に入らない。フィリピンでは古本屋なんていうのはだめですからね。

伊藤 だめというのは何ですか。

高橋 要するに、いったん出版されたら、それを手に入れるというのは難しいんです。なかなか苦労するものですから。

伊藤 古本屋がない？

高橋 ないに等しいですね。普通の本でも簡単には手に入らないですね。たまたまフィリピンに滞在した時に、古本を専門とするところに頼んだりして、まったく個人的に頼んで「これとこれとこういうの」というと、「なかった」とかですね。どうやって手に入れるんだかわかりませんが、そういった流通ルートがなくて。つい最近、日本人の方でフィリピンに長く滞在してる人が、古本屋を始めましてね。インターネットで始めまして、やっと立ち上がったばかりです。この夏、その人に会ってきまして、もし関心がおありでしたら、連絡方法をお教えいたしますけれども。

中見 Garcia Collection というのは、フィリピンのオークションに出たんですか。

高橋 そうです。

中見 オークションはあるわけですか。

高橋 でしょうね。そこで、どのぐらいお金を叩いたかわかりませんが、まあまあ納得できる値段で手に入れたということですけどね。一度、見にいっしょってください。

中見 ご参考までに、東洋文庫にはベラルデ・コレクションというのがありまして。ごく最近その目録が、池端さんが編集されました。戦前に何とかいう研究所……東亜研究所じゃなくて、いっぱいありましたでしょ。その研究所が買って、日本に持ってきた。戦後、上智にあったと聞いています。それを東洋文庫が取り返して、それで目録を出したということです。

それからもうひとつは、ジョージ・アネスト・モリソンの息子さん——私も会ったんですけど、もう亡くなったと思いますが、そのモリソン二世コレクションというの、フィリピンとかそちら方面の文献が多いはず。それも東洋文庫でいま整理が終わって、目録が出るはず。日本ではあまりフィリピンのコレクションというのはないんだそうです。ベラルデ・コレクションというのは、一昔前の本でしょうけど。立派な目録が一昨年ぐらい、東洋文庫から出ました。

伊藤 だいぶ前になりますけれども、劉傑たちが「周仏海日記」を出して、あの前後に汪兆銘の日記というものが一部、出まして。

高橋 雑誌に出まして、途中でサスペンドされちゃったんですね。

伊藤 なんか第二档案館は、汪兆銘政権関係の……

高橋 汪兆銘日記は、第二じゃなくて上海档案馆じゃなかったですか。

伊藤 上海档案馆ですか。非常にたくさん持ってるんだという話を劉傑がしておりましたけれども。彼自身もなかなか見られないと。これだって、日本がつくった傀儡政権ですから、やっぱりちゃんと史料収集をやって後始末をしないといかんのだろうと思うんですけどね。

高橋 そうですね、責任があると思うんですけどね。

伊藤 中国の側はとんでもない言うだろうけど。

高橋 それから京都の陽明文庫ですけれども、これは荻窪の荻外荘に移すんだという計画がありましたけれども、潰れたらしいですね。

伊藤 潰れたというよりも、無期延期みたいな。というのは要するに、バブルの時に計画をしてたんですよ。あそこの荻外荘の一部を売って、そのお金で史料館をつくらうという考えだったわけですけども、税金を払ってやると結局、面積が残らないというわけですよ。それでしばらく延期ということになってましてね。いまのところ、ますます地価が下がってるわけですから、見通しはまったく暗いという感じですね。その時の計画では、篤麿と文麿のものはこっちに移そうという、荻外荘をそれで保存しようという計画だったんですけどね。

高橋 しばらく前に京都に、防衛研究所戦史部の庄司さんと一緒に調査に行ったことがあるんですけども、1週間ぐらいでしたか、陽明文庫の総繪造りのお蔵のなかに入れてもらいまして見させてもらったんですけども。近衛さんの手帳に関心があったんですけど、何も書いてなかったですね。軍の悪口がちょっと書いてありましたけれども。ああいう記録というのは、あの方はほとんど残さずに。

伊藤 そうですね。どうして離散したのか僕もよくわかりませんが、残ったものは戦史部で目録を作った2冊がありますね。その他に、その後山本有三さんが持っていた近衛文書——これ何で山本さんが持っていたのかちょっと定かでないようなものもだいぶ含まれていましたけれども。というのは、本来は近衛家になきゃいかんものだと思うようなものも入ってましたのでね。ただ、彼が生前から近衛の伝記を書くことを依頼されていたというふうに言われていますので、あるいはその関係で近衛から持ち出したものかもしれませんが。かなりいいものがたくさんありました。この整理をやりまして、あれは見せるんじゃないですか。僕が目録をとって、向こうへ置いてきましたけれども。そのなかには、いろいろな人の談話なんかも入ってありましたし、あの頃としては珍しかったんだろうと思います。『細川日記』の原本の筆写がありまして、ちょっと違う題名が付いていたのであれっと思ったんですけども、そういうものから含めてずいぶんたくさんありました。

中見 東洋文庫のは官報ではありません。東洋文庫に来られた中国人の方を案内する時に面白いからいつも連れて行くんですが、汪精衛関係で面白いのは、東京にあった汪精衛政権の大使館の文書があります。それが10ケース位あって、劉傑さんという方がドクター論文の時に使われて。ただ、日本国内の華僑の問題とか、いわば機密文書じゃないんです。秘密は秘密なんでしょうけど、いちばん重要なものではなくて。それから、あちこちに汪政権の領事館みたいなのがあったんですね。それとの間のやり取りとかそういうもので、戦後になって古本屋から買ったものと聞いています。劉傑さんが簡単な紹介をどこかに書かれています。

それからヨーロッパの、ご参考になればということで申し上げるんですが、ドイツの中国にあった大使館の文書というのが、戦後ドイツに戻りまして、その中国大使館文書が、ポツダム連邦アーカイブにあります。第1次大戦前のドイツ帝国のものはもちろんないんですが、第1次大戦以後の中国大使館の文書があって、当然それはいちばん最後のほうは汪精衛政権ですね。それはけっこうあって、東ドイツ時代は見せてもらえなかったものが、統合して。私も一度行って、中国関係の目録を全部マイクロに撮ってきたんですけどね。なかなか起こす暇がなくて……。

第二档案馆は、私が第二档案馆に行っていたのはかなり昔でして、最近の状況は知りませんが、半分ぐらいが汪精衛政権の文書なんです。日本人で汪精衛政権の文書をあそこに見にいったという人、知ってます？ 聞いたことないですね。

高橋 入れないんじゃないですか。

中見 いやいや、見れますよ。第二档案馆は親切で、4、5回行きまして、私のやってるのはある意味ではモンゴルの独立だ何だって、あまり中国側にとり好ましくないテーマですけれども、よく見せてくれました。その後どんどん公開が進んでいって。ただ、写すと、「何字分写したからいくらください」という、いわゆる保存料とかね。最近の情勢はちょっと、行かれた方に聞かれたほうがいいんじゃないですか。

高橋 イギリスのパブリックレコードオフィスは、よくいらっしゃいますでしょ。

中見 よくでもないですけど。あそこはそれこそ、インドネシアなんかの植民地別のインデックスがありますよね。マイクロフィッシュにした目録もあったかと。

Hoover のは、人別にあって、例の肅公権文書みたいなのがあって、そのなかにたとえば、汪精衛に参加して、その後アメリカに逃れた人なんかの文書はないんですか。

高橋 それは、高宗武とか、陶希聖の話ですか。

中見 とか、そういうのは。

高橋 何もないですね。高宗武はお会いしましたけど。

中見 まだ生きてるんですか。

高橋 いえいえ、もう亡くなりました。ちょっと前に亡くなりましたけれども、まだお元気だった時に。

中見 彼のパーソナルペーパーとか何かは？

高橋 もう全然そういうのはないみたいですね。話だけお聞きしましたけれども、戦後ずいぶん生活するのに苦労したと。しかし最初は、蒋介石からお金が出ていたようだけれども、途中で途切れたんじゃないでしょうか。ずいぶん奥さんの援助によって支えられたんだと。

中見 奥さんが、株か何かで。

高橋 そうです。株で儲けたとか、そんなことを言ってましたけども。それから、「どうして裏切ったんですか」というようなことを聞いたんですけどね。そうしたら、「俺も若かった。あの頃は野心家だった」と、そんなことを言ってました。史料的なものはあまり、インタビューでは出なかったんですけどね。Hoover にあるのは、汪精衛関係の全集と言ったらいいですかね……。完全にあれではないですけど、その時々に出していた言論集とか和平建国関係のものとか、あるいは若い時のものとか、そういうものがわりと充実してあるんですね。そこで全てあるわけではないですけども。バークレーも一部探して、ハーバー

ドの **Yenching Library** でも一部探したと。そういうようなことをやった時期がありましたものですから、ここに挙げたんですけどね。あと新聞なども、そこまではまだ入ってないんですけれども。

伊藤 **East Asian Collection** というのは、本館と別なところにあるやつでしょ。

高橋 そうですね。ところが、この3週間前に **Hoover** に行きまして、別用で行ったんですけどちょっとお聞きしたところ、**Hoover** ではもう歴史に関心なくなったというので、**East Asian Collection** がなくなるというよりは、もうこれ以上やらないんだということで、総合図書館のなかの一部に入れちゃうんだというような話を聞きましてね。益子さんとも会ってきたんですけれども、益子さんにそんなことを言ったら、「そうなんだ」というようなことを言っておりますね。

伊藤 益子さんはだけど、いまはあそこに関係ないんですよ。

高橋 もうリタイアして、6、7年になりますか。

伊藤 要するに、もう集めないと。

高橋 そうですね。もう歴史的なことはやらずに、ポリシーオリエンテッドな研究をどしどしやるんだと。共和政の政権がやっと来たものですから、それと関係してるのかなと思うんですけれども。そんなことを耳にしました。

伊藤 新しい本は買うわけですね。

高橋 買うんでしょうね。

伊藤 僕はあそこで見た史料のなかで非常に面白いなと思ったのは、中支那派遣軍の降伏文書ですね。ちょっとしか見ませんでしたけども、机一つ、足が一部破損してるというようなところまで、非常に細かく書いてあるんですね。引渡の文書ですね。小銃がどれぐらいで、弾薬がどれぐらいでということから始まって、備品まで非常に事細かに書いて。これが降伏した軍隊のやる仕事かと思うほどですね。

高橋 いまの自衛隊と同じじゃないですか(笑)。何かありますと、灰皿の数まで書きますから。

伊藤 いや、いまの自衛隊は別に、戦争に負けたわけじゃないんですから(笑)。降伏した時に向こう側に、「これですよ」と渡したものが、どうして **Hoover** まで行ったのかなと思って聞いたら、やっぱり市場で買ったという。

高橋 そうでしょうね。かなりのお金を持って、中国、それから日本と。神田の古本屋街はもちろんですけれども、行脚して集めたと。

中見 戦前にスタンフォード大を出られた日本人の方がエージェントで東京にいて、その方がものすごく買って、それを整理したのが池信隆さんで、それから高瀬保さんという方がやられて、次に益子さんになったと。だから、面白いから益子さんに、昔の **Hoover** がどうやって日本の史料を集めたかとか、お話をどこかに書いたらどうですかというようなことを申し上げたんです。そうしたら、いちばんそのあたりの事情をご存じなのは池先生だというふうに言われて。それで2度目に行った時に、益子さんはほとんどリタイアで、フィンドレー・ナオミさんがお仕事をされていましたが、まだいますか？

高橋 いやあ、いないと思いますね。

中見 彼女は親切で、未整理のパーソナルペーパーなんかを見せて下さいました。それで私は、篠田治策とか木村鋭一を見たんですけどね。戦前にスタンフォードを出た日本人

がたまたま東京にいたんですか。その方をエージェントにして古本屋から買ったらしいです。ただ、いちばん熱心に集めたのは共産党関係でしょ。日本共産党の戦前の資料らしいですが。

伊藤 それはだけど、本館のほうに行っちゃってる？

中見 いや、日本語は本館じゃなくてあそこにあります。

伊藤 そうですか。

中見 あれは文字で区別して、本館はヨーロッパ語とかロシア・ソビエト、中央アジアで、東アジアはあその倉庫のなかにあって。パーソナルペーパーは別室みたいなのところがありました。加藤陽子さんは、かなり調べに来られたはずですよ。

伊藤 整理を頼まれて行ったんですよ。その時は益子さんですよ。だけどあれは完成しなかったんだと思いますけども。

高橋 整理がですか。

伊藤 ええ。だから、カタログにならなかったと思いますね。

中見 荒木の日記も、あれは一部ですね。他の部分というのは日本にあるんですか。

伊藤 いやいや、荒木の日記って紹介されたのは、あれは荒木家から出たものなんです。

中見 ただ、スタンフォードにある分以外の日記というのは……

伊藤 いやいや、スタンフォードにはたぶん、僕は日記は見なかったように思うんですが、あるんですか。

中見 ええ。荒木の日記があると聞きましてね。一部だと思うんですが。

伊藤 僕と加藤陽子さんと『中央公論』で紹介したのは、あれは荒木家の物置のなかから出てきたやつですね。いま、国会図書館の憲政資料室に入っていますけれども。

ちょっとこの場を借りて僕も追加でお話しますが、先日、元憲政記念館にお出でだった渡辺さんから連絡がありまして、彼はいま重光葵記念館というものに関わっておって、それで重光文書がいま一応全部、憲政記念館に寄託になっております。それで、目録はまだ完備はしてないんですね。今回、湯河原に記念館をつくるにあたって重光家でいろいろ搜索をしたところが、まだいろいろあるということで、そのなかから出てきたもののひとつが最高戦争指導会議の関係の記録。これは重光が最高戦争指導会議に出て帰ってきて、たぶん加瀬俊一氏が秘書官だと思いますが、加瀬さんに口述して筆記させたものらしい、そういうものがありまして。これは、原書房から出した『敗戦の記録』、あれは会議の議事自体は全然出てないわけですね。そこを重光のあれを見ますと、誰がどういう主張をしたかということがある程度わかるんですね。それでちょっと意味があるだろうというので、これをいま出版計画をつくって、200ページぐらいのものじゃないかなと思っていますけれども、その期間に重光がいろんな人から受け取った書状などを付け加えて1冊の本にしようかという計画を進めています。まだ重光家からは他にも出てくる可能性があるという話でありました。

いつもそうなんですけれども、たとえば憲政なら憲政に入ってますといっても、そこをもういっぺんおさらいしないと、かなり大事なものが残っていたりすることがありますので、史料収集の場合はそれを心掛けなきゃいかんかなと思っています。高橋亀吉文書なんかもそうですけれども、「重要なものはみんな証券図書館に行きましたよ」と家族の人は言っていたんですけれども、「つまらんものですけど、残っているもの」と向こうがおっしゃ

ったものを憲政資料室にもらったわけですが、もらってみたら高橋家の人も驚くほどたくさんものがありまして、内容的にもかなり大事なものがたくさんあったということで。また、実は高橋家が今度は南青山の家を壊すので、最後に残っている高橋亀吉全著作というのをどうしようかというので、僕のところの大学にもらおうとしたんですけども、その時にもういっぺん洗いざらい調べてくださいというふうにお願いしてあります。

やっぱり、史料が残ってる場所というのはそういうものじゃないかなと思うんですね。まったく一物も残っていないというのももちろんあるわけですよ。そういうお宅もありますが、あるところは本当に、樺山資紀なんかもそうですけども、憲政にあるにもかかわらず、蔵のなかにまたいっばいあったということでした。しかし、僕もいまちょっと、史料を集めるのはいいが後始末はどうしようかということで、大変悩んでおりまして、これはそういうものの収集のきちんとした機関がなければかなわんということで、この研究会もやっているわけですが。多少、政治的に動こうと思っておりますが、なかなか物事はうまくいかず、こんなことしゃべっていいのかわかりませんが、中曽根さんに何とかしたいと言ったら、「それは村上正邦に相談しろ」というのでいっておりましたら、あんな状態になりましたですね（笑）。もういっぺん、親元のほうに行かなきゃいかんということになっております。

ですから、来年度からの科研費を申請していますが、3回目というのはちょっと難しかりょうかなとは思いますが、何とかして通るように政治的に動いてみようと思っておりますので、4月の研究会も行います。それは浅野君が紹介してくれたので、司法関係の史料の話をしてくださるという小沢隆司さんという方がお話しくださるということであります。ですから、今日もフィリピン関係なんていう、いままでわれわれがあまり考えたことのなかった、しかし日本の占領下にあつて、戦前から日本とフィリピンはそう浅い関係ではないはずですが、そういう史料での情報というものを、少なくとも報告書の形でまとめて、将来それでいろいろ検索していくということのために、いろんな人を見つけなきゃならない。そういう意味で、こういう人に話を聞いたらいいんじゃないかとか、そういう情報をぜひいただきたいと思っております。今日は、予定したより30分早くなつてしまいましたが、いちおう質問も尽きたようですので終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(終わり)